山の仲間たち　続き

大人になって、みんなそれぞれ違う世界に別れていった。箕岡は北海道、亀田は就職して茨城県に、大貫は大学院にのこり、泉先生について忙しかった。僕も家族も店を立て直すの躍起だったので、たまの休みに日帰りの山行しかできず、自然、高校の仲間とも十年ちかく、疎遠になってしまった。昭和四一年、結婚して間もない僕のアパートへ、後輩の戸山高校二年生が塩見岳へ登る途中、落ちてけがをして動けない。一緒にいた四方野君がついて救助を待っている。救援に出て貰えないかとの連絡があり、鹿塩までいった。その時から、春田先生や加藤、中里の年下のＯＢや山岳班の現役の人たちとのつながりができ、西穂高遭難の一七年の慰霊行をしないかとの話がでてきた。命日より一月早い十一月に四十人近いＯＢと現役と金子さんと伊豆野さんと島田さんの遺族が参加して小雪の降る玄文沢で花をそなえ、線香を手向けました。遺族の皆さんも晴れやかな表情でお参りされました。予算がないので近距離用の片側しか暖房の通らない寒いマイクロバスで工事中の梓川沿いの道を行ったのでした。山本や田部井の島田の中学の同級生も数人いました。なかでも、山本と小野さんは元気で、帰りは中の湯まで歩くといってさきに出発していった。木村小屋で一服した我々のバスが中の湯に着いたとき、二人はもう、風呂上がりだった。「ヤマモト、まったやったんだろう」と田部井がいうと、山本はニヤリとしてザックをあけた。中には数匹のイワナがまだ、口をパクパクやっていた。東京へ戻るバスの中では話に花が咲き、年に一度くらいは一緒に出かけようと話がでたけど、その頃はまだ、話がまとまりませんでした。

でも、秋になると上高地へだけは何度か足をはこんだ。いつの頃か、帰りに鈴蘭まで登り、金山ヒュッテに泊まるようになった。ここは、小野さんがかって受験勉強と称して、オデキだらけの足で一夏をすごした宿で、仲間がだんだんお世話になるようになったのだった。夏休みに蟻ケ崎高に通う若い娘さんもいて、彼女目当てに通うＴＵＳＡＣの先輩たちもいたらしい。

小野さんはここで羽根をのばしすぎたため、翌春の受験も失敗したのではないかと我々後輩どもは考えています。

子供たちが小学校に上がる頃、山本や田部井家の家族とスキーやキャンプにゆくようになった。私どもの娘と同い年の女の子が両家にいて、遊び相手にちょうどよかったせいでもある。上州武尊のキャンプ場に行ったときは、田部井が御殿のように大きな二室もあるテントを新調して大騒ぎをしたし、宝川温泉の大露天風呂に入りに行ったりした。どこで覚えたのか山本は料理が好きで、いつも料理当番を引き受けてくれたりしました。なかには、川で釣りをしたとき、どこかの知らない小父さんの白髪を何本も後ろから抜いてしまった女の子、この時は親が平謝りに謝って無事にすみましたが・・・。また学校で「おすもうチャンピオン」になった女の子もいて、なかなか活発に遊び回りました。上高地に行ったり、大人だけのスキーの時もありました。藤原湖の近くにスキーに行った時は、他に神宮さんがいましたが、山本の新調のキャンピングカーが急坂をチェーンを巻いても上れず、後ろのステップに田部井と僕がしがみつくように乗ってバランスを後に移してヤット登りだした。「ここで、止まるとまたスリップする。」と思ったのか、山本はそのまま、宿までの数キロを止まらずに走ってしまった。吹き付ける雪の中で手をはなせない、顔は冷たいを通り越して痛い、鼻水は凍ってしまう、散々な目にあいました。

明くる日のスキー、私だけが下手くそで、「早く来い。」とか「お前は向こうの緩斜面ですべってろ」とか、こちらも、ひどい目に遭いました。このスキーが「どうしても、パラレルで回れなければ」と思い、厳しいシゴキだといわれる北海道の糠平温泉まで特訓を受けに行くキッカケになりました。

山本のこの車は長く乗り、我々も随分重宝させてもらいました。最後の頃は、雨の日は奥さんが助手席で傘をさしていたほど、雨漏りが酷くボデイがもったいないと言いながらあきらめたのでした。

家内や娘もスキーにのめり込み、オイルショックのなか、帰途のガソリンを用意してまでスキーに行くようになりました。蔵王温泉には樹氷のシーズンや五月の連休には車を連ねて行きました。そのうちに、独身時代にスキーをやっていた矢能や亀田、スキー初級の箕岡まで加わるようになりました。矢能はいつもザックの中にスキットルを入れていて、ゴンドラのなかでチョビット飲むコニヤックは格別の味でした。「いい匂いがするなア」リフトの小父さんに云われたことがあります。春は、気分良くヨーデルを大きな声で唱う女性、神宮さんも仲間です。「若いなア」リフトの小父さんはいいます。「でも、この方は年金貰ってスキーしてるんですヨ」「ジャア俺より年上だなア」田部井とおじさんのヤリトリです。神宮さんの怒ること、怒ること。素晴らしいスキーを見せる大橋さんとも何度も一緒にすべりました。うしろから見ると滑りのスタイルが美しい、女性でした。

「今度は夏山だなァ」と話がでて、室堂から五色ケ原までの縦走にきまりました。インドのグルカ兵のようなスタイルの大島や亀田、矢能に田部井、それに浜島から箕岡がやってきました。初日、一の越から立山、大汝を往復して一の越山荘に泊まりました。私はみんなの迷惑になっていけないと鼾防止器

なるものを持参したのですが、宿がものすごい混雑で、相室の女性のイビキにまで反応してしまい一晩中眠れませんでした。明くる日、獅子岳をへて五色ケ原に早めにつき雪渓のうえで、大島持参の「白石温麺」を試みました。傾斜した細いトレンチを堀り、そこへ麺を流しながら、食べようというのです。麺は余熱で、うまく流れませんでした。茗荷や生姜の薬味もあり、味は格別でした。これがヤミツキになり、山行のたびに色々試みるようになりました。剣沢での「冷やし中華」や大日岳での「チーズフォンデュー」などとても美味しく食べることができました。なかには西穂の独標でコーヒーをたてお菓子を食べたとき「地べたに落ちたものでも、フーフーってすれば大丈夫ョ」という傑作があります。少ない時ほど何でも、欲しくなるのは当たり前で食べてしまいましたが、、云われた女性は家からブラジャーを後ろ前にしてきて、宿まで気がつかなかったという付録もありますが・・・・。そうそう、蔵王の春スキーの帰途、春のドカ雪で東北道が全線閉鎖になってしまい、ほとんど飲まず食わずで二十数時間かかってやっと家にたどりついたなんてこともありました。栗子峠付近で相撲放送の「ヒョウショウジョウ」を聞いたのに、一二時を過ぎたのにまだ、福島市内でした。途中の食堂のほとんどが「高速」ができたため閉鎖、頼みのコンビニもすでに棚はガラガラで食べ物は何も買えません。往路、車に忘れたコチコチに凍った「オニギリ」がヒーターで暖まり、美味しく食べられたのは大助かりでした。その数年後、玲子が怪我をしたり、苗場にマンションを購入したりしたので、蔵王に全く行かなくなってしまいましたが、樹氷原を滑り抜ける楽しさや雪質の素晴らしさは格別です。

スイスアルプスでスキーをとの話がでて二年、九四年三月、ようやく話がまとまりました。当初の予定では、五，六人だったのですが箕岡と泉（成澤）允子さんと僕の小学校の同級生の八坂加津子さんの

四人でした。女性二人は先発して、箕岡とふたりでＢＡの北回り便で後を追いました。僕としてはヨーロッパへアンカレッジ経由でゆくのはこの時が最後でした。トランシットの待合室はガラガラで気持ちが悪いほど。でも乗り換え後、北極圏を飛ぶ機内から見たオーロラの美しさは圧倒的でした。かってフェアバンクスで見たものより、大きく素晴らしいものでした。何しろ、飛行機の中から時間で十分近く見える、大きさも、天国の入り口もかくやと思われるものでした。ツェルマットでは八坂さんとガイドの河野夫人が待っていました。なぜか八坂はベソをかいています。聞けば暖冬で一度、融けかけた雪や氷と新雪のコンビがこなしきれない。ガイドについて行くのが大変とのこと。「何、大丈夫、僕らと日本流に滑ればいいのだから」と午後もおそいので、すぐゴルナーグラートまで上がりフィンデルンアルプまで、登山電車をリフト代わりに使い、夏のハイキングコースを何度も滑って、ヨーロッパのスキーと雪になれました。スイスのスキーガイドの一滑りのスパンが長いのです。日本のように、チョコチョコとまりません。ウェーデルンよりもパラレルターンで大きく回りながら眺望を楽しんで滑るようです。斜面が大きいのでスピードをコントールするのに、この方が良いのでしょう。翌日、アルペン・メトロに乗ってスネガへ、かって風を避けるため、横向きに座って、毛布を貸してくれたリフトは、もう随分昔のことになってしまった。東側から距離をおいたマッターホルンを見ながら、ウンターロートホルン（三一〇〇米）まで、リフトで登りを適度なコブもある、滑りの良い斜面を滑ります。フィンデルンは「ハイジ」に出てくるような可愛い、昔風の家が数軒並ぶ小さな部落で、ここのレストランで昼食をと思ったのですが、予約がとれず 下まで滑ります。スイスのスキー場では、昼食は予約しないと席が取れない所がほとんどです。快適に滑って行くと、途中で待ちかまえていた、写真屋さんに、グループ写

真を撮られてしまいました。午後は長い長いＴバーリフトでスネガに登り、ゆったりと滑り、ホテル・アレックスに戻りました。泉さんが洗濯をしたいが、「コインランドリー」はないかというので、「フロントに聞けば」言ったらすぐに帰ってきた。「私の英語が通じない。」ききかたが悪いのではと一緒にいって聞き直したら、すぐ教えてくれた。勇躍、大きなバッグをかかえて彼女は出ていったが、今度は「使い方」がドイツ語表示でわからないのだと、箕岡「そんなもの、番号の通りいれれば、洗えるサ」といって笑った。三度目の正直で帰ってこないので、洗っているなと思っていたら、山の上で撮られた写真が大きく引き伸ばされて売っていたので「皆さんの分も買ってきました」にはギャフン。その後、シトックホルンの深いコブコブの斜面に挑戦したり、イタリア側のプラトーローザの標高差九００米もある大斜面を滑ってチェルビニア村を往復しました。広い大きなスキー場を滑る魅力のほかに、物価の安いイタリアでお土産を買うたのしみもあります。その帰途、テオドールパスでは、おみやげを買い込んで大きな荷物を背負い、強風に吹かれて酷いものでしたが、スキーで滑って国境を越えるという体験をしました。この時も、箕岡は「テオドール峠付近は国境線は赤いラインが引いてある。あまり飛ばすと、見落としますヨ」といって女性軍をかついでいました。ホテルに戻った僕は、地下のナイトクラブ隣のトイレで用ををたして、出ようとしたら鍵が中からは解錠できないのです。クラブは冬期営業していないらしく乾燥室からエレベータまで、歩く靴音が「コツコツ」聞こえるけど、こちらの声は届かず、呼べど叫べど 誰も来てくれない。日本のホテルと違い一枚板を加工した頑丈なドアで高さは二米余り、窓は高い所に「ハメゴロシ」で開かないガラスは厚く外側は雪囲いもある。三〇分もたつと寒くなってきた、このまま朝までいると凍死するかも、との考えも頭をかすめる。ようやく、五フラン硬貨を使っ

て蝶番の飾りの部分を壊すのに成功、そのカケラをドライバーの代用にしてドアを外し出ることができました。弁償するのも「イヤ」だし、バカバカしいのでフロントに文句を言いに行きました。「何故、私がこんなトラブルに巻きこまれなければならないのか、あなた方のメンテナンスが、悪いのダ」と文句をいいました。私の英語が上手く通じず、こちらでも油汗をかく始末でした。翌日、ツェルマットをたち、ベルナーオーバーランドへ移動しました。ブリーグで国鉄に乗り換え、またＢＯＢに乗り換えてグリンデルワルドに入ります。ここでは、残念なから、三日しか滑れませんでした。でも、世界一と言われるメンリッヘンのゴンドラで滑ったり、アイガーグレッシャーからクライネシャディックまで滑ったり、小さな谷を跳び越えたり快適なスキーでした。グリンデルワルドに一夏滞在したことのある箕岡の説明でアイガーの北壁を見上げながら飲むビールの味も格別でした。でも、「俺はＴバーが苦手なんだョ、頼むから一緒に乗ってくれョ」といっておきながら、「シングル」といってバーに乗る相手を捜している若い女性がいると、飛びつくよう乗っていってしまったのは許せません。おかげで、私は二キロもの長い距離をバランスをとりながら苦労して、乗っていったのですから・・・・・。

この時アイガーグレーシャーのヒュッテで飲んだのはホッヘン・デュンケルとホッヘン・ペルレのハーフ＆ハーフでした。当時は日本にも輸入されていたビールですが、最近みることができません。

二年後の九六年の夏、シャモニーからマルテイニを経由してツェルマットに入り、同じコースを箕岡、亀田と三人でたどりました。チューリッヒからジュネーブへの飛行では、雷で行ったり戻ったりの繰り

返し「バリバリッ」の雷鳴も聞こえ、翼の先が無くなるのではないかと思いながら雨上がりのジュネーブ着陸、雨上がりの町で、レマン湖の花火をみることができました。エーギュ・ドゥ・ミディにゴンドラで登り、わずか一〇〇米たらず昇って北峰の展望台からガスの切れ間にモンブランの針峰群を見る。僕は体調が悪かったせいか軽い高山病になってしまった。エルブロネルへのゴンドラは強風で止まり、改札係はガールフレンドとキッスの最中、うまいことヤッテヤガル・・・・。。夜、ル・クロッションでローヌのピノ・ノワールを二本も飲んでしまった。メニューに時期はずれの鹿が載っていたが、聞けばニュージーランドの赤鹿とのことで、あきらめてブレスの鶏にしました。

シャモニーからマルティニの間は直通のモンブラン・エキスプレスもあるのですが、普通電車でシャトラールという小さな駅でスイス側の電車に乗り換えて行きました。ただ、シャモニー駅で列車を待つ時間、セーターなどは、梱包してしまっていて、とても寒い思いをしました。電車は急な段丘の上を縫うようにラックレールをきしませては走ります。景色は素晴らしく、デイーゼルやＥＬ　電車と車両も多彩にかわり、ラックレールの区間も長く、オマケにカモシカが数頭　線路敷きに入ってしまい、彼らが出て行くまで停車のオマケつきでした。ブリーグで登山電車に乗り換えてツェルマットに到着しました。この滞在中、マッターホルンは雲がかかってほとんど顔を出しません。初めて、ツェルマットに宿泊する亀田さんは、しきりマッターホルンを見たがります。秋、冬のシーズンやホテルの向きによっては、これでもか、これでもかと言うほど見え、その上、夜中に目覚めるとマッターホルンに押しつぶされるのではないかと思うのですが。箕岡は「マッターホルンの見えない、ツェルマットもなかなか良いもんだ。」とからかいます。シュヴァルツ・ゼーの小さな教会でステンドグラスを見、外で持参の昼を

食べました。水を飲もうとすると「ガス」とともに吹き出し顔を洗ってしまった、誰だ間違えて「ガス入り」を買ったのは・・・・、その後ぶらぶら、ツム・ゼーまで歩き始めるがこの道が結構遠いのです。私はスキーを使える春の方が行動半径が伸びて快適なのかなァと考えながら、歩きました。でも、遠くのカウベルが一つのメロディになって聞こえる中を歩く、夏の昼下がりもなかなかのものです。

グリンデルワルトでは駅前のダービーに宿をとり、ヨッホに行ったり、メンリッヘンからクライネ・シャデックまでを歩いた。スキーで滑れば三〇分位のところ、歩けば二時間以上かかります。小雨の中を歩きはじめましたが、途中から晴れに変わり、ユングフラウ、メンヒ、アイガーの眺望を楽しむことができました。でも、とても牛糞の多い道で、三人とも大分、身長が伸びたようです。昼はこの日も山小屋でとりました。レシチという馬鈴薯のグランタンの巨大なものが亀田さんのお気に入りで、ここでもまた食べていました。ここから下は、かって箕岡とスキーで下った所なので、今回は電車に乗りました。あの年は暖冬で結構汗をかいたものでした。たった三年前のことなのに、車内放送はハングル、中国語の案内が増えていました。　亀田と箕岡はもう一度ヨーロッパアルプスをできたらメンヒとかブライト・ホルンをと思っているらしい。私は花の時期にピレネーを越えて、サンディアゴ・コンポラティスの道を歩きたいと思っている。かってアルザスやブルゴーニュを訪ねた際、ヴェズレーやル・ピュイまで足をのばして、サント・マドレーヌ・バジリカやサンミッシェル・デ・ギーュを再見したいと思っています。マグダナラのマリアのことをマタビラキとジョークを飛ばす人たちはつき合ってくれそうにありません。そろそろ家内の出番がやって来るようです。